

# 鳥羽離宮跡を歩く

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



鳥羽離宮の位置(1974年の航空写真)[国土数値情報/昭和49年京都]国土交通省

鳥羽離宮跡は洛南の地、京都市伏見区竹田・中島地区にまたがり、北は名神高速道路、南は府道伏見向日線、東は近鉄京都線、西は鴨川にはさまれた一帯に位置しています。その大きさは東西1.2km、南北1.0kmで面積は約120haです。

鳥羽離宮は平安時代後期、いわゆる院政期に、白河天皇の後院として応徳三年(1086)に造営が開始されました。御所の周りに池を掘り築山を造った壮大なもので、まるで都遷りの如しと表されました。鳥羽離宮の造営は白河天皇とその孫にあたる鳥羽天皇によって約70年間続きました。

造営された施設は南殿・北殿・泉殿・馬場殿・東殿・田中殿と呼ばれる御所と、それぞれに証金剛院・勝光明院・成菩提院・安楽寿院・金剛心院と名づけられた御堂が付属していました。さらに池や島などの庭園が設けられ、御所・御堂・庭園の3点セットが鳥羽離宮跡の特徴といえます。この頃、阿弥陀信仰や末法思想が流行した時代ですが、白河天皇と鳥羽天皇は鳥羽離宮において、極楽浄土の世界を現世に具現化したと思われます。

昭和35年(1960)から発掘調査が始まり、現在まで148次を数える

調査が実施されています。その結果、文献史料にみられる御所や御堂、それにともなう庭園の様子が明らかになりつつあります。

現在、そのよすがを示す遺構は多いとはいえませんが、東殿の安楽寿院や北向山不動院、馬場殿跡と想定されている城南宮、白河天皇陵・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵の3基の御陵が現存しています。また、城南宮の西側、国道1号線を越えたところにある古墳のようにこんもりとした小山が、和歌にも詠まれた秋の山で、広大な南殿の園池をしのばせる唯一の築山遺構となっています。(前田 義明)



安楽寿院 平安時代の保延元年（1137）に安楽寿院御堂が建立された。江戸時代に建てられた大師堂・阿弥陀堂・書院・庫裏・鐘樓が現存する。本尊は重要文化財の阿弥陀如来坐像。



五輪塔 城南ホームの前に現存。鎌倉時代の弘安十年（1287）二月の年号がある。重要文化財に指定されている。



近衛天皇陵 鳥羽天皇の中宮美福門院得子によって多宝塔が建立され、美福門院の墓所になるはずであったが、近衛天皇の遺骨が納められ御陵となった。現在の多宝塔は、慶長元年（1596）伏見大地震の倒壊後、豊臣秀頼の寄進によって建立。



鳥羽離宮跡の復元図（財）京都市埋蔵文化財研究所の初代所長である故・杉山信三氏によって鳥羽離宮跡が復元され、説明板が安楽寿院境内に設置されている。



石仏 平安時代の凝灰岩製の石仏で、江戸時代に釈迦・弥陀・薬師三尊の三体が成菩提院跡から出土。一体は京都国立博物館で展示。石仏を削り取って子供の顔に塗る風習があったらしく痛みが激しい。



北向山不動院 寺伝によると、大治五年（1130）鳥羽上皇の勅願で建立。本尊の不動明王が皇城鎮護のために北向きに安置されている。



白河天皇陵の堀跡 御陵の周囲には堀が巡らされ、内側には大きな石で階段状に石垣を築いていた。当初の三重塔はなくなり、堀も埋まっていた。（南から）

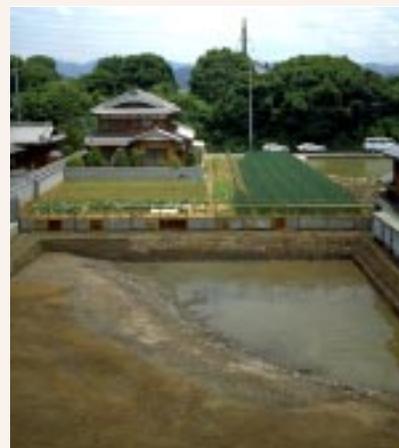


城南宮 鳥羽離宮鎮守の神としてまつられ、現在方除の神として知られている。馬場殿跡に想定され、城南寺明神御霊会の祭礼には流鏑馬・競馬が行われていた。その流鏑馬が承久の乱の発端となった。

金剛心院跡 鳥羽天皇によって造営された最後の御所・御堂と庭園。発掘調査によって建物の配置や規模が文献史料と一致することが明らかとなった。（東から）



金剛心院跡出土の飾金具



東殿の庭園跡 近衛天皇陵と鳥羽天皇陵、北向山不動院に囲まれた一角に庭園跡が検出されている。（西から）